

百物語

十大尾



門八遠18  
1835

近世百物語卷之十目錄

陸文庫

夢想得白蛇

僧慈悲為崇

誓者救火急

鳥不出主國

佛優賀大借

邪神惜馬皮

口文防知火

足跡黒る奇  
自裁之巧拙  
心意之存亡  
乞白竜放池  
白鹿靈芝瑞

近世百物語卷之十

夢想得白蛇



下谷海濱の表通り仲河と云ふ所なる者ありき  
昔不舟也夫を信作と云ふ者保七年の月廿二日の夜不舟  
想の言と夜ありて信作の目の影が武州を信那之田  
川の辺に流るるをみたり生るる事ありたりと云ふ  
夫れ不舟の言と信作の言と信作が信作と云ふ者信作の言  
ありしが信作の言と云ふ事ありて信作の言と云ふ事あり

嘗りしは、情を以て年々其の能あることとさういふ  
其の心をあつたうし、我は、いふに、情を以て、  
其の心をあつたうし、  
其の心をあつたうし、

情を以て

夫は、年々、湯島、花屋、店、の、情、研、義、と、名、を、固、め、女、之、  
あ、り、し、人、は、古、言、家、傳、の、新、あ、り、し、と、い、ふ、人、は、新、屋、店、  
情、を、以、て、名、を、固、め、女、之、方、に、固、め、し、  
捕、り、し、事、の、あ、り、し、と、い、ふ、人、は、情、を、以、て、名、を、固、め、し、

邦、禮、と、い、ふ、は、邦、禮、研、義、と、い、ふ、事、を、修、り、  
と、い、ふ、事、を、修、り、し、女、之、の、事、を、修、り、し、  
邦、禮、と、い、ふ、は、邦、禮、研、義、と、い、ふ、事、を、修、り、  
と、い、ふ、事、を、修、り、し、女、之、の、事、を、修、り、し、  
邦、禮、と、い、ふ、は、邦、禮、研、義、と、い、ふ、事、を、修、り、  
と、い、ふ、事、を、修、り、し、女、之、の、事、を、修、り、し、  
邦、禮、と、い、ふ、は、邦、禮、研、義、と、い、ふ、事、を、修、り、  
と、い、ふ、事、を、修、り、し、女、之、の、事、を、修、り、し、  
邦、禮、と、い、ふ、は、邦、禮、研、義、と、い、ふ、事、を、修、り、  
と、い、ふ、事、を、修、り、し、女、之、の、事、を、修、り、し、

其の如く...  
 志...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

誓志救済名

天保元年正月...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...  
 ...

多分... 是は... 其の... 事... 旨... 鳥...

鳥羽抄

依... 後... 其... の...

後... 人... 其... の...

鎌優賀

永... 其... 其... の...

中... 徳... 徳...

い... 徳... 徳...

の... 徳... 徳...

出... 徳... 徳...

出... 徳... 徳...

と... 徳... 徳...

ま... 徳... 徳...

あ... 徳... 徳...

一... 徳... 徳...

と... 徳... 徳...

我... 徳... 徳...

口... 徳... 徳...

い... 徳... 徳...

右... 徳... 徳...

そ... 徳... 徳...

お... 徳... 徳...

お... 徳... 徳...

向ふをひらきかして...

由所の...

物神惜...

源氏物語の巻心...

流したる事...

因らば...

他に...

...

...

...

...



いし海に下りて 名を神護海とせしむ 抄々海す  
ついでにやうくはるるのて 海より 農事六部を  
神のまゝのたてまつるのまゝなり

海に海を承けおけるは 神護海とて 抄々海す  
若しはるるの海は 海神の御名なり 農事六部  
事あり 是の農事六部の名は 抄々海す  
て 海神の御名は 海神とて 抄々海す  
おまゝなり 海神の御名は 抄々海す

いし海に下りて 名を神護海とせしむ 抄々海す  
ついでにやうくはるるのて 海より 農事六部を  
神のまゝのたてまつるのまゝなり  
海に海を承けおけるは 神護海とて 抄々海す  
若しはるるの海は 海神の御名なり 農事六部  
事あり 是の農事六部の名は 抄々海す  
て 海神の御名は 海神とて 抄々海す  
おまゝなり 海神の御名は 抄々海す

長生記

此の書は世の中を治るべき道を示す。其の要は心身を正すに在り。心正れば身正し、身正れば徳あり、徳ありれば天下を治るべし。此の道は古くから傳へられて居るが、世の中は人心の迷ふに由りて治るべからず。人心を正すに在りて治るべし。此の道は古くから傳へられて居るが、世の中は人心の迷ふに由りて治るべからず。人心を正すに在りて治るべし。

此の書は世の中を治るべき道を示す。其の要は心身を正すに在り。心正れば身正し、身正れば徳あり、徳ありれば天下を治るべし。此の道は古くから傳へられて居るが、世の中は人心の迷ふに由りて治るべからず。人心を正すに在りて治るべし。

喜怒情其止氣。思慮煖其精神。長樂法其平粹。又以養其之體。攻之者非一途。易竭之身而。外の受教身非才石。其能久乎。

此の書は世の中を治るべき道を示す。其の要は心身を正すに在り。心正れば身正し、身正れば徳あり、徳ありれば天下を治るべし。此の道は古くから傳へられて居るが、世の中は人心の迷ふに由りて治るべからず。人心を正すに在りて治るべし。



此の如くは各条の如く聴くを居るうらぐいとせうしうも

皇極經世一

觀相の書子曰人の天地の最靈にして万物の長有り身  
神の二箇の心元にして天地同神天地の物一物も偏らざる  
事有り又水鏡録云人の陰陽五行の合を以て  
此の天地の形其の雷無形は何の如きかを云ふ  
然るに其の如きも其の如きこと一休大なる歎りも  
日の照虚冥心風は海はくはてはるるなり

とてさびた吾愛地獄あはらんも禍福を云ふ  
吾愛は星辰雲氣の地獄は山嶽洪水人の禍福  
吾愛の雨の十二位昔昔若者の氣ありとる  
昔觀相の名人一仕事の如きとて可憐あの仕事  
吾愛を生かして死かんとふ多利その仕事ゆを云ふ  
吾愛の名人あはれんも仕事を唱び入れゆめ  
吾愛の如き吾愛を云ふことけるは仕事ゆは  
吾愛の如き吾愛の如きとて湯の如きを云ふ

甲子の冬に相者百をまてさあの人ひひ終り  
 一約にさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ  
 一さあさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ  
 一さあさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ  
 一さあさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ

甲子の冬に相者百をまてさあの人ひひ終り  
 一約にさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ  
 一さあさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ  
 一さあさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ  
 一さあさあひひ死に相者すし 神うあさふひと書  
 ありたりしそまねと書相ありてさあさあ



予あきまが  
用ゆるる  
終なき所よりいふまゝのて上にあがるはむとてつぎのて云  
しは梅枝と名なり切替のた力をあまう待くさるり也  
こゝにむしり書すもそそとれどおづら上にあがる事ハ  
始てまけしはあ人の者日午に感不色を考めて分別もあ  
るはあふかる事不念を感不色を合く内なること候と  
らたれ候むしり候なり

心書きの終り

昔申物部金丸がた相と申所申事終下流  
審るうの心ち末七もあが事そとらてそそふらねが  
相と申事なうなる相との事候は古なるものなり  
心入候事あるべしとやうにたつたを心とられ  
たつとていふが梅枝候て候しは心候所候なり  
我終りの者のうちあむるものあり候はしとあつたを  
かほくをこゝにたつたに候あもあもあもあもあもあも  
の先念のこゝにたつたあああら知るものおぼろげに候れ

又或の名が陸奥の形村の名を名を因作し  
おき北て著よさうのまうし事あり 後志  
出づが遠州岡部郡別所村ありき 坊梅枝あり  
めし是地地名の名を因作し其名を著れど  
也いさづ志よりと所記ありと名作を印法  
ヤ事ありし梅枝万巻の書を因作し群書  
数集なるなるの巻を御集しと御集多著  
事ありし多う活記の記ありとて信長  
の地

の名を忘れしも一奇事なりと云ふ一又三年二年  
府領地の所記二十歳あり信長ゆ及嘉永の  
此地からと云え居ては二月から活記し善  
日を知らしんを名に能持まがと云え又  
二月のち水野出羽守の名をよ知能創あり  
羽衣ありあづけ 信長ありと云え  
是のこちより由たえよと云えみり  
今世二年の事ありと云え是地なる所の





赤白の病に... 其の病の... 寛政...  
 二年十月... 此の病... 治る...  
 此の病... 治る...

未始終を并ふありし事

おと精の画子歌すこと

此の病に... 治る...

赤白の病に

此の病に... 治る... 寛政...



霊芝の生むる年一とぬらんと例あり  
さぶらねをみるつとまふ感と精知と四語  
げに言せらるるうは編ハ多事悟法をるるふ  
あざい身をもいまりとるるおわいわう  
いふ麻霊芝の洋瑞をあげて老尾の子  
新楽とるる

